

A study of Learning Effects of Service Learning on High School Students : In Case of Service Learning Forum Munakata's Programs

山田, 明
自由ヶ丘高等学校

<https://doi.org/10.15017/9084>

出版情報 : 生活体験学習研究. 7, pp.39-49, 2007-03-31. The Japanese Society of Life Needs
Experience Learning

バージョン :

権利関係 :



高校生におけるサービス・ラーニングの学習効果に関する研究

～サービス・ラーニング・フォーラム宗像の実践を通して～

山 田 明

A study of Learning Effects of Service Learning on High School Students

— In Case of Service Learning Forum Munakata's Programs —

Yamada Akira

Abstract It has been rapid and huge social change in the 21st century. High school students are afflicted by background at the sense of values diversified in Information Society, and there is a situation where their brains are racked for the subject of Self-Formation. From viewpoint of the Self-Formation of high school students, practice of the Service-Learning program which can acquire independence and social responsibility is expected. In this paper, Service-Learning is introduced for high school students, and the prospect of Self-Formation of them are clarified through the practice. This research examines learning effectiveness regarding high school students who participated in the programs of Service Learning Forum Munakata, which supports high school students.

I はじめに

21世紀は前世紀にも増して、急激な社会変化に伴う先行き不透明な厳しい時代である。このような時代を背景として、青年期の高校生は情報化社会の中で多様化する価値観のもとに不安や迷いに悩まされており、自己形成の課題に苦慮している状況がある。中央教育審議会においても、その答申の中で教育の状況を「ゆとりのない生活」・「社会性の不足や倫理観の問題」・「自立の遅れ」等を指摘^①しており、特に高校教育においては、「在り方・生き方」や「個性」を重視した自己形成を提言している。

そこで高校教育における自己形成支援の教育方法の視点から、高校生が現実社会での活動を広げ、自立や社会的責任を獲得できる学習プログラムの実践が期待される。本論文では、米国のサービス・ラーニングの教育方法を高校生対象に導入し、その実践を通して高校生の自己形成支援の見通しを明らかにする。サービ

ス・ラーニングとは、地域社会のニーズを前提とし、教科学習と関連した内容のサービス活動（ボランティア活動）を通して地域貢献を果たし、自己肯定感（セルフエスティーム）・知識（リテラシー）・技術（スキル）を身につけることを目的とする学習方法である。この教育方法は、米国の教育改革における青少年の学力向上や市民性の涵養に学習効果があるとされ、主体的な社会参加の資質・能力を身につけることを通して自己形成を促進する方法としても高く評価されている。

本研究では、高校生のサービス・ラーニングを支援するサービス・ラーニング・フォーラム宗像^②が主催するプログラムに参加した高校生について学習効果を検討するが、その際、自己評価として事前及び事後のアンケートによる検定や参加者の「振り返り日誌」の自由記述から検証する。なお本論文の成果は、論者の本学会誌（第3号）の論文「サービス・ラーニングにおける体験学習としての効果」に次の2点を加えるこ

連絡・別刷り請求先 (Corresponding author)

自由ヶ丘高等学校 (〒807-0867 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-3)

Jiyugaoka High School (1-3 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu City Fukuoka Pref., 807-0867 Japan)

とができる。

1. プログラムの内容と学習効果について、今回は海外との文通を通して、外国人の日本語習得を支援する国際交流をテーマにした地球市民としての活動であったが、今回は「市民ニーズ調査」という身近な地域社会での活動を通してより現実世界を学習体験させたことで、参加者の学習効果が向上しその変容が明確に把握できたこと。
2. 研究手法について、心理学的アプローチを活用した検定による検証を試みたこと、さらにその補足として自由記述を検討したことでその実証性を高めたことである。

II サービス・ラーニング

サービス・ラーニングの用語の使用については、米国において1960年代の出版物の中に見いだされる³⁾が、公式な使用例としては1990年コミュニティ・サービス法(The National and Community Service Act of 1990)⁴⁾においてであり、その後全米に広く普及した。この連邦法によると、サービス・ラーニングの定義に関し、次の1.~4.の内容を満たすプログラムとしている。

1. 地域社会のニーズにあったサービス・プログラム
地域社会のニーズにあったサービス経験を通じて主体的な参加の中から学び成長すること、また児童・生徒・学生に地域社会の中で現実の生活を体験させ、獲得している知識や技能を使う機会を与えること(「知の再編成」)。
2. 市民性を涵養するプログラム
学校(教室)を超え、地域社会の中に入った児童・生徒・学生の学びを深めることに力を入れ、他者を思いやり行動することで市民性、道徳性、倫理感の向上を援助すること。
3. 児童・生徒・学生の教科カリキュラムとサービス活動が関連したプログラム
教科カリキュラムへの統合がなされたものであり、かつ児童・生徒・学生がサービス活動の中で行動し見聞したことについて、考える・話す・書くことなどのリテラシーの養成が意図されたカリキュラムであること。
4. 参加者に活動経験の振り返り(総括)の時間を含んでいるプログラム

以上のように、サービス・ラーニングとは、学力向上や市民性の涵養を目的とし、学校の教科カリキュラムとサービス活動を関連させ、活動を常に振り返りつつ計画的・継続的に運営する教育プログラムである。この教育方法は、市民性という青年期の自己形成に必要な不可欠な資質・能力の涵養を目指しており、現代高校生に求められる不安定な社会を生き抜くための自己形成を支援するものでもある。

III 学習効果 ～サマー・プログラム2004の実践を通して～

論者が代表を務めるサービス・ラーニング・フォーラム宗像のプログラム⁵⁾を対象に、その学習効果を検証する。高校生の活動に期待したい学習効果については、自己肯定感の獲得や向上、学力向上につながる学習意欲の高揚、主体的な社会参加の資質・能力(例えばコミュニケーション能力・リーダーシップ・情報収集能力とそれらの総合的な力である課題解決能力や地域社会への意識向上)の涵養を視点におくことにする。

1. プログラムの活動概要/宗像ニーズ調査プログラム:表[1]

福岡県宗像市は先進的な自治体として知られ、生涯学習・市民参画条例・次世代育成の取り組みに市民の声を取り入れている。そこで、21世紀を担う高校生にも自分たちの地域社会の創造に主体的な関わりをするという自覚を求めている。本プログラムでは、高校生が宗像市民のニーズ調査やその結果に基づく市への提言というサービス・ラーニングを実践した。活動は2004年7月から8月の夏期休業を利用、分析や提言書作成を経て市への提言は11月上旬に実施した。今回のプログラムに参加した福岡県宗像市在住の公立高校生23名(男子5名/女子18名)は、ボランティア・センターが発信するインターネットや各高校及び公共施設に設置したパンフレットを見て自ら活動を申し込んできた高校生であり、学習のレディネスについては低くはなかったが、不登校経験者や友人に誘われてという消極的な高校生も多く、サービス・ラーニングの学習効果が期待される状況であった。

表1 宗像市へ提言しよう ～宗像市をより住みよくするために～

項目	内容
①関係する科目 (教科との関連)	「地理・歴史科」／「公民科」／「情報A」
②地域社会のニーズ	高校生に市民参画条例などへの参加・提言など21世紀の宗像市づくりの主体となる自覚が求められている。その中でアンケートやインタビューを通して、市民のニーズを探り提言していく。
③サービスの種類	アンケートやインタビューをもとに宗像市民のニーズを把握する。アンケートやインタビューをまとめ宗像市へ提言していく。
④必要とされる地域社会の資源	市民との交流①高齢者や障害者などの施設でアンケートを実施（社会的弱者といわれる人への視点）②公民館・多目的施設などの公共施設利用者へのアンケートの依頼と実施③駅での街頭インタビューの依頼と実施。
⑤準備 (Preparation)	これまでの市民アンケートの収集、検討。アンケート施設、インタビュー場所の選定。宗像市マップ（公共施設・福祉施設の地図）の作成。
⑥活動 (Action)	アンケート・インタビュー内容及び場所の決定。アンケート・インタビューの実施、整理、分析、提言報告書の作成。市民参画条例委員会や市への提言。
⑦振り返り (Reflection)	参加した高校生による活動の振り返りシートの記入（成果と課題など）。提言内容についての他者（行政及び地域社会の人々）による評価。自分の成長（活動前と比較して）に関する振り返り。
⑧お祝い (Celebration)	関わった人たちへの報告会（プレゼンテーション）を実施。
教科学習との関連（「高等学校学習指導要領」を参照） 「地理A」：(1)地域性を踏まえてとらえる現代世界の課題、地域的課題の地理的考察～諸地域からみた地球的課題～／「地理B」：(3)現代的諸課題の地理的考察、環境及びエネルギー問題の地域性、居住・都市問題の地域性／「現代社会」：内容全体／「倫理」：(3)現代と倫理－現代に生きる人間の倫理（社会参加と奉仕）・現代の諸課題と倫理／「情報A」	

2. 学習効果の検証

(1) T検定による分析

高校生の学習効果について、活動の事前及び事後のアンケート調査⁶⁾を基にT検定（23名を対象）を実施し、自己評価による活動前後の変容を検証した。なお検証にあたり、4観点（関心・意欲・態度／思考・判断／技能・表現／知識・理解）を分析の観点とする。

① 関心・意欲・態度（自主性、自発性、リーダーシップ、道徳性、倫理観）

「私は毎日、新聞を読み、かつニュース番組を見る。」の質問に関して、「該当する」が事前23.3%から事後30.0%へ、「良く該当する」が事前6.7%から事後16.7%と着実に上昇している。参加者は、サービス・ラーニングの活動を通して社会への関心を向上させつつあるが、このことは自主的・自発的活動の萌芽とも考えられる。

「道徳性や倫理的判断」に関して、「該当する」・「良

く該当する」・「大変良く該当する」という肯定的回答が、事前50%から事後63.3%へと増加しており、活動により規範意識や他者のことを考えるという道徳性や倫理観が高まっている。しかし、この資質は長い時間を経過して育むものであり、急激な向上を望むのではなく、活動を継続することによりその涵養を意図していくことが重要である。

「私にとって個人的には、助けを必要としている人々に対して、私の時間を自発的に提供することが重要だ。」との質問に関しては、「同意する」が事前33.3%から事後53.3%へ、「強く同意する」が事前3.3%から事後6.7%となっており、「同意する」が20%上昇している。自発的な活動の必要性を参加者の高校生が認識した結果だと受け取れる。また主体的な社会参加への認識の高まりでもあり、リーダーシップの高揚の可能性が感じられる。

表2 関心・意欲・態度

質問事項	選択肢	有意差	事前	事後
私は毎日、新聞を読み、かつニュース番組を見る。	全然該当しない	*	13.3	3.3
	該当しない		40.0	33.3
	わからない		16.7	16.7
	該当する		23.3	30.0
	良く該当する		6.7	16.7
	無回答		0	0
道徳性や倫理的判断	全然該当しない	*	13.3	3.3
	あまり該当しない		36.7	33.3
	該当する		40.0	40.0
	良く該当する		10.0	20.0
	大変良く該当する		0	3.3
	無回答		0	0
私にとって、個人的には、助けを必要としている人々に対して、私の時間を自発的に提供することが重要だ。	全然同意しない	*	0	0
	同意しない		3.3	3.3
	良くわからない		60.0	36.7
	同意する		33.3	53.3
	強く同意する		3.3	6.7
	無回答		0	0

*** ≤0.001 ** ≤0.01 * ≤0.05 + ≤0.1 / 数値は% / N=23

② 思考・判断（社会認識、地域社会に対する意識、批判的思考力、判断力）

「私は、地域に関する問題解決への関心を持つことができる。」の質問に関しては、「同意する」・「強く同意する」という肯定的回答が、事前53.4%から事後70.0%へと増加しており、活動により地域社会への関心が飛躍的に高まっていると見られる。

「私にとって個人的には、政治的な仕組みに少しでも影響を与えることが重要だ。」との質問に関しては、「同意する」・「強く同意する」という肯定的回答が、事前20.0%から事後46.7%へと倍増しており、現実社会の活動の中で多くの課題や矛盾を経験し、そのことが政治的な関心へと結びついていると見られ、批判的思考力の涵養もうかがわれる。

「大人は、地域のために時間を提供すべきだ。」の質問に関しては、「同意する」・「強く同意する」という肯定的回答が事前で36.3%、事後で53.4%となっており、いわゆるサービス活動の必要性を認識し始めている結果ではないだろうか。ここにも、社会認識や地域社会への意識の向上が見られる。

「公共サービスを受ける人々（収入がなく、公共サ

ービスがなければ、生活ができない人々）は、無償でサービスを受ける事について責任を感じるべきだ。」との質問に関しては、「全然同意しない」・「同意しない」・「良くわからない」という意見が事前63.3%、事後70.1%に上り、「同意する」・「強く同意する」という肯定的意見は事前36.7%、事後30.0%と少数である。これは、先の①関心・意欲・態度で分析したことに関連し、個人の責任というより社会（政治・経済）の現代的課題として受けとる高校生の傾向を示していると思われ、社会認識、批判的思考力、判断力の向上とも言えるのではないだろうか。

「サービスを必要とする状態にさせる社会の問題は、しばしばその人々の力の及ばない環境の結果である。」の質問に関しても、上記の「公共サービスを受ける人々（収入がなく、公共サービスがなければ、生活ができない人々）は、無償でサービスを受ける事について責任を感じるべきだ。」の質問と同じように肯定的回答は少なく「良くわからない」という意見が事前80%、事後63.3%に上った。これは、現代的課題として行政サービスの必要性を是認しているが、市民がその社会的課題を主体的に解決できるのかという問題には自信が

持てず「わからない」という判断になったのではないかと考えられる。

「将来のことを、いつも視野に入れること」の質問については、「該当する」・「良く該当する」・「大変良く

該当する」という肯定的回答が事前で53.3%、事後で56.7%となっており微増となっている。現実的な課題を通して将来への見通しを持つことに効果が見られる。

表3 思考・判断

質問事項	選択肢	有意差	事前	事後
私は、地域に関する問題解決への関心を持つことができる。	全然同意しない	*	0	0
	同意しない		3.3	0
	良くわからない		43.3	30.0
	同意する		46.7	53.3
	強く同意する		6.7	16.7
	無回答		0	0
私にとって、個人的には、政治的な仕組みに少しでも影響を与えることが重要だ。	全然同意しない	+	0	0
	同意しない		6.7	13.3
	良くわからない		73.3	40.0
	同意する		20.0	40.0
	強く同意する		0	6.7
	無回答		0	0
大人は、地域のために時間を提供すべきだ。	全然同意しない	*	3.3	0
	同意しない		10.0	3.3
	良くわからない		50.0	43.3
	同意する		33.3	46.7
	強く同意する		3.3	6.7
	無回答		0	0
公共サービスを受ける人々（収入がなく、公共サービスがなければ、生活ができない人々）は、無償でサービスを受ける事について責任を感じるべきだ。	全然同意しない	+	3.3	16.7
	同意しない		13.3	16.7
	良くわからない		46.7	36.7
	同意する		36.7	30.0
	強く同意する		0	0
	無回答		0	0
サービスを必要とする状態にさせる社会の問題は、しばしばその人々の力の及ばない環境の結果である。	全然同意しない	**	3.3	0
	同意しない		6.7	0
	良くわからない		80.0	63.3
	同意する		10.0	36.7
	強く同意する		0	0
	無回答		0	0
将来のことを、いつも視野に入れること	全然該当しない	+	3.3	6.7
	あまり該当しない		43.3	36.7
	該当する		30.0	26.7
	良く該当する		23.3	23.3
	大変良く該当する		0	6.7
	無回答		0	0

*** ≤0.001 ** ≤0.01 * ≤0.05 + ≤0.1 / 数値は%/N=23

③ 技能・表現（人間関係能力、コミュニケーション能力、表現力、発信力）

「他の人の意見に共感すること」に関して、「該当する」・「良く該当する」・「大変良く該当する」の肯定的意見が、事前で76.7%、事後で93.4%とその学習効果は顕著である。地域社会での活動で、同世代交流や異世代交流を通じ、この活動が人間関係能力・コミュニケーション能力・理解力・表現力の向上に効果的影響を与えていると考えられる。

「私は、友だちとしばしば政治や社会の問題について議論をする。」に関する質問に関して、「全然該当しない」・「該当しない」・「わからない」が事前で80%、事後で66.6%となっている。現代の高校生は基本的に議論することに概して好まないし不得意である。ただし、事前と事後で否定的回答が13.4%減少していること、「該当する」との肯定的回答も事前の20%から事後の33%と13%増加しているところにサービス・ラーニングの学習効果が現れている。

表4 技能・表現

質問事項	選択肢	有意差	事前	事後
他の人の意見に共感すること	全然該当しない	+	0	3.3
	あまり該当しない		23.3	3.3
	該当する		66.7	60.0
	良く該当する		3.3	26.7
	大変良く該当する		6.7	6.7
	無回答		0	0
私は、友だちとしばしば政治や社会の問題について議論をする。	全然該当しない	*	16.7	13.3
	該当しない		43.3	13.3
	わからない		20.0	40.0
	該当する		20.0	33.0
	良く該当する		0	0
	無回答		0	0

*** ≤ 0.001 ** ≤ 0.01 * ≤ 0.05 + ≤ 0.1 / 数値は% / N=23

④ 知識・理解

「社会の諸問題に関する知識」に関する質問に関して、「全然該当しない」・「あまり該当しない」との回答は、事前は73.4%、事後では43.3%に上り、基本的には社会の課題についての知識は強くない高校生像が見られる。しかし事前から事後にかけて否定的回答が30%減少していること、「良く該当する」・「大変良く

該当する」という肯定的回答が26.6%から53.3%に上昇していることから学習効果が認められる。知識・理解については、長期的な視野で育むものであり、教科学習と関連したサービス・ラーニングを継続して経験することで、単なる教科学習の知識だけではなく広義の学力向上へと結びついていくものと考えられる。

表5 知識・理解

質問事項	選択肢	有意差	事前	事後
社会の諸問題に関する知識	全然該当しない	**	16.7	3.3
	あまり該当しない		56.7	40.0
	該当する		23.3	30.0
	良く該当する		3.3	23.3
	大変良く該当する		0	3.3
	無回答		0	0

*** ≤ 0.001 ** ≤ 0.01 * ≤ 0.05 + ≤ 0.1 / 数値は% / N=23

(2) 事後アンケートによる分析
事後アンケートの結果を基に、①活動全体について

の自己評価、②自己肯定感、③教科学習との関連の視点からサービス・ラーニングの学習効果を検証する。

① 活動全体についての自己評価

表6 活動全体についての評価

質問項目	選択肢	事後
私は今回のサービス活動の経験について、次のように評価している。	良くなかった	0
	普通だった	3.3
	良かった	40.0
	素晴らしかった	53.3
	無回答	3.3
私は、高校で受講している他の授業と比べて、今回のサービス活動を次のように評価している。	あまり学ばなかった	3.3
	少しだけ学んだ	6.7
	ある程度学んだ	23.3
	より多くのことを学んだ	13.3
	たくさんのことを学んだ	50.0
	無回答	3.3

数値は%/N=23

今回のサービス・ラーニングで、良い経験としている回答が96.6%、高校で受講している授業に比べて充実した学びができたという肯定的な回答が93.3%であ

り、活動全体での満足度が非常に高い活動であったと考えられ、達成感や自己肯定感が高まったとも言える。

② 自己肯定感

表7 自己肯定感

質問項目	選択肢	事後
本当の貢献ができたと思う	該当なし	3.3
	たまに	23.3
	時々	23.3
	かなり	46.7
	いつも	3.3
	無回答	0
地域社会のニーズにおける目標を達成した	該当なし	3.3
	たまに	20.0
	時々	33.3
	かなり	40.0
	いつも	3.3
	無回答	0
私個人の人的成長が良く理解できた	意義がなかった	0
	少し意義があった	40.0
	大変意義があった	53.3
	最高に意義があった	6.7
	無回答	0

数値は%/N=23

質問項目	選択肢	事後
精神的に成長した	意義がなかった	0
	少し意義があった	33.3
	大変意義があった	43.3
	最高に意義があった	23.3
	無回答	0

「本当の貢献ができたと思う」・「地域社会のニーズにおける目標を達成した」の質問に関する回答で「該当なし」はともに3.3%、「私個人の人間的成長が良く理解できた」・「精神的に成長した」の質問に「意義がなかった」という回答はともに0%とほとんどの参加高校生が達成感を得て、自己肯定感を向上させていることは大きな学習効果である。

③ 教科学習との関連

「高校で学んだ知識を使う部署（立場）に配置してもらった」及び「私の参加したプログラムは、高校の授業との関連があった」に関して「該当なし」の回答は0%、「授業で学んだことをもっと深化させることが

できた」に関して「大変意義があった」との回答は60%、「授業で学んだことを現実の問題に当てはめて考えることができた」では「大変意義があった」・「最高に意義があった」が合わせて56.6%の回答、「他の人と如何にすれば、効果的に協力できるかを学んだ」という人間関係構築力、コミュニケーション能力、情報収集力という主体的な社会参加に関わる資質・能力に関して、「大変意義があった」・「最高に意義があった」が合わせて70%の回答と自己評価は高い。教科学習との関連が明確にカリキュラム化されていたプログラムであったことで、参加者が活動の意図を意識したことが学習効果をもたらした要因であろう。

表8 教科学習との関連

質問項目	選択肢	事後
高校で学んだ知識を使う部署（立場）に配置してもらった	該当なし	0
	たまに	20.0
	時々	26.7
	かなり	46.7
	いつも	6.7
	無回答	0
私の参加したプログラムは、高校の授業との関連があった	該当なし	0
	たまに	33.3
	時々	30.0
	かなり	33.3
	いつも	3.3
	無回答	0
授業で学んだことをもっと深化させることができた	意義がなかった	3.3
	少し意義があった	36.7
	大変意義があった	60.0
	最高に意義があった	0
	無回答	0

数値は% / N=23

質問項目	選択肢	事後
授業で学んだことを現実の問題に当てはめて考えることができた	意義がなかった	3.3
	少し意義があった	40.0
	大変意義があった	53.3
	最高に意義があった	3.3
	無回答	0
他の人と如何にすれば、効果的に協力できるかを学んだ	意義がなかった	0
	少し意義があった	30.0
	大変意義があった	50.0
	最高に意義があった	20.0
	無回答	0

(3) 振り返り日誌にみる学習効果

サマー・プログラム2004における「宗像ニーズ調査プログラム」に関して、活動した高校生の振り返り日誌からサービス・ラーニングの学習効果について次の3項目に整理することができる。

① 地域社会との関わり

「宗像市がより住みよい市になることに貢献できた。」・「地域社会の人々が改善して欲しいことがインタビューを通じてわかった。」・「アンケートやインタビューの結果を少しでも市民生活の向上に役立てたいと思った。」・「アンケート用紙の回答を検討しながら、多くの市民の要望があり、それを少しでも実現できればと思った。」というように、高校生が地域社会の現状を知り、その改善に少しでも加わったということで達成感とともに、自己肯定感が高められている。

② 学校と地域社会を結ぶサービス・ラーニング

「今までは自分の住んでいる町について深く考えることがなかったが、今回の活動を通じて、自分の町をあらためて考えることができた。」・「学校で学んだ知識を活用して高校生ができる地域貢献を通し、地域社会と学校が結びついていることを実感した。」との意見があるように、サービス・ラーニングが地域社会の認識と地域貢献に効果的であった。

③ サービス活動から得られる知識・技術

「見知らぬ人に声をかけてインタビューすることは難しかった。」・「今回の経験で様々な年代の人々と話（コミュニケーション）ができたことが良い体験にな

った。」・「質問事項の具体的内容は、高校の現代社会で学んだ知識を大いに活用した。」・「パソコンでの情報処理でエクセルのソフトを使用した。」・「アンケートの質問事項の内容は、学校での地理・歴史・公民の授業に深く関係していた。」・「アンケートの分析は、色々な視点から考えることが必要だとわかり、高校で学んだすべての知識を使うことになると思った。」・「これからはもっと学校の授業を大切にしようと思った。」という振り返りがあるように、学校での学習活動全般や教科学習との関連を強く意識しており、これからの学びへ生かそうとしている。

IV おわりに

高校生に求められる自己形成は、自己肯定感とそれに伴う学ぶ意欲が基盤となり、その上で知識や技術が身に付くという関係で成り立つ。その自己肯定感の獲得には現実社会の人間関係のもとでの社会体験が有効であり、活動を通しての達成感や成就感を味わうことで体得される。本研究が地域社会における社会奉仕体験と教科学習を関連させた体験型学習であるサービス・ラーニングを検証した理由がそこにあり、サービス・ラーニングを通して自己理解や他者理解を通じた自己肯定感の獲得、学力向上（「学ぶ力としての学力」の向上にかかわる学習意欲・コミュニケーション能力・批判的思考力）、地域社会の活動を通しての社会認識、リーダーシップの涵養に一定の効果があることを明らかにした。本研究では、高校生の自己肯定感の獲得を基盤とした主体的な社会参加の資質・能力（市民性）の涵養に有効な学習機会を米国のサービス・ラーニングに範をとったが、この教育方法を日本の教育現

場に定着させるためには、教科学習と体験活動の関連というカリキュラム・マネジメントの視点、さらに学校教育と地域社会の協働を通しての提供という社会教育・生涯学習論の視点からの展望を開くことが肝要となる。

注

- (1) 「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について／1996・1997答申」、「新しい時代を拓く心を育てるために／1998」など。
- (2) 高校生を対象としたサービス・ラーニングの学習機会を提供することを通し、主体的な社会参加の資質・能力（市民性）を涵養させることを目的として設立（2004年）されたNPO。スタッフは、大学・高校の教員を中心に構成されており、活動拠点を福岡県宗像市に置いている。
- (3) 1966年、米国テネシー州流域開発公社と東テネシーに所在する大学との産学協同プロジェクトとして、「サービス・ラーニング」の用語が使用され出版物として発刊されたという。（Timothy Stanton, Dwight Giles, Nadinne Cruz, *Service-Learning – A Movement's Pioneers Reflect on its Origin Practice and Future* – Jossey Bass Publisher, 1999.）
- (4) ボランティアに関する財政・運営支援法。例えば「青少年奉仕活動プログラム」（現在のLearn and Serve America）には、連邦政府が州政府を通じて支援をしており、その参加者は2004年度では約165万人に及んでいる。（Corporation for National Service, Fiscal Year 2004 Performance and Accountability Report 2004, 2005.3.31）
- (5) サマー・プログラム2004で実施した「宗像ニーズ調査プログラム」に福岡県福岡市・古賀市・宗像市・北九州市の公私立六校に在籍する宗像市在住（23名）の高校生が参加した。
- (6) Janet Eyler, Dwight Gilesが1995年に実施した全米大学調査（20大学1535名）に使用したアンケート調査を基に日本の高校生用に修正して実施した。

参考文献

■[日本語文献]

佐々木正道編著『大学生とボランティアに関する実証

的研究』ミネルヴァ書房、2003。

佐藤一子『NPOの教育力～生涯学習と市民的公共性～』東京大学出版会、2004。

佐藤三郎『世界の教育改革～21世紀の架け橋～』東信堂、1999。

佐藤慶幸・那須壽・大屋幸恵・菅原謙編著『市民社会と批判的公共性』文眞堂、2003。

末本誠・松田武雄編著『生涯学習と地域社会教育』春風社、2004。

瀧本佳史『地域計画の社会学～市民参加と分権化社会の構築をめざして～』昭和堂、2005。

南里悦史『あすへの生涯学習と地域づくり』光生館、1993。

南里悦史『改訂子どもの生活体験と学・社連携』光生館、2001。

西村和雄・戸瀬信之編訳（アメリカ教育省他著）『アメリカの教育改革』京都大学学術出版会、2004。

日本教育方法学会編『新しい学びと知の創造』図書文化社、2003。

日本社会教育学会編『ボランティア・ネットワーク～生涯学習と市民社会～』東洋館出版社、1997。

日本社会教育学会編『子ども・若者と社会教育～自己形成の場と関係性の変容～』東洋館出版社、2002。

日本生涯教育学会編『年報第24号／生涯学習と公共性』2003。

日本生涯教育学会編『年報第25号／新しい時代の生涯学習支援者論』2004。

不破和彦編訳『成人教育と市民社会～行動的シチズンシップと公共性～』青木書店、2002。

本間政雄、高橋誠編著『諸外国の教育改革～世界の教育潮流を読む～』ぎょうせい、2000。

■[英語文献]

Billig S., Susan R., Jane C., *Service-Learning, Research on Models to Enhance Impacts*, Information Age Publishing Inc., 2005.

Bryan Richard Rossi, *Impacts and Effects of Service-Learning of High School Students*, University of Minnesota, 2002.

Janet Eyler, Dwight E.Giles Jr., *Where's the Learning in Service-Learning*, San Francisco Jossey Bass

Publisher, 1999.

Kraft R., *Service Learning : An Introduction to its Theory, Practice and Effects*, Education and Urban Society, 1996.

Rahima C.Wade, *Community Service Learning ~ A Guide to Including Service in the Public School*

Curriculum~, State University of New York Press, 1997.

Stanton T., *Service Learning ~ A Movement's Pioneers Reflect On Its Origins, Practice and Future ~*, Jossey Bass Publisher, 1999.